

## 循環型ファッションへの新たなアプローチ

### ―和裁の技術を用いた和服と洋服の循環―

伊藤 正浩

#### 一、はじめに

SDGsという概念が提唱されてから、アパレル業界でも環境への配慮に対し様々な取り組みが行われてきた。限られた資源を守るために、無駄なものを生み出さない仕組み作りの重要性は増してきている。ファストファッションを展開する企業やメーカーがそうであるように、日本でも衣類の短サイクルを改善するために仕組みの見直しが図られている。

一方で、日本は特有の着物文化を有する国でもある。この文化を支えてきた和裁という技術は和服業界とともに低迷しているのが現状である。減少しつつある和裁への関心を広げるためにも、和裁という技術が環境配慮の取り組みに有効的な手段となり得るかを検証したい。同時に、誇るべき伝統技術を次代へ伝えるための意識や行動を考察することが、本研究の狙いである。

筆者は、ファッションブランド「[o]nio」（ゼロイチユウイチゼロ）の伊藤広宣と共働し、株式会社後藤和裁（名古屋市中東区）の協力の元、プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトでは、循環をキーワードとして和服と洋服を行き来できる製品の開発を行っている。本研究ノートは、プロジェクトで開発した製品を、衣類の短サイクルな廃棄問題の解決方法の一つとして提案し、その研究成果をまとめたものである。

まずファッション業界の現状の再確認を行い、業界が抱える環境・社会問題や環境に配慮した取り組みを「二、研究の背景と目的」に提示する。「三、プロジェクトの実施と結果」は、和服・和裁の有効性と現代における問題点を調査したものである。日本の伝統技術を守りながら新しい仕事を創出するための新しい試みとして、循環型リサイクルの仕組み作りを提案する。プロジェクトで開発した「着物」⇄「洋服」を相互に仕立て直すための型紙の設計、仕立て直し作業の手順については検証結果をまとめ、実際に展示会を開催して消費者側へのヒアリングも実施している。

以上を通して、この新しい試みが日本の伝統技術である和裁の仕事を創出するアプローチになり得るか、また着物文化への興味関心につなげるきっかけになり得るかを考察する。

#### 二、研究の背景と目的

##### （一）ファッション業界が抱える環境・社会問題

まず、SDGsの概念や循環型リサイクル等の環境配慮の仕組み作りが進められてきた背景を明らかにするため、業界の現状の再確認を行った。

次に挙げるように、ファッション業界では原材料の調達から生地・衣服の製造、輸送、消費そして廃棄に至るまでそれぞれの段階で多くの環境問題・社会問題を抱えている。

##### ・製造工程

衣服を作る工程では、多くのCO<sub>2</sub>が排出されている。原料となる植物の栽培や染色工程では大量の水が使われ、綿花の栽培では多くの化学肥料も使用されるため土壌汚染の問題も深刻である。生産過程で余った生地や端材の廃棄物も多く、コスト削減のための大量生産による余剰在庫が問題となっている。

##### ・洗濯による環境負荷

消費する側でも洗濯で大量の水が使用され、化学繊維の服から出るマイクロプラスチックによる水質・海洋汚染が環境負荷の原因と考えられている。

##### ・製造&消費の短サイクル

ファッションの製造・消費の両サイクルにおいて、流行の終わりと共に大量に廃棄されてしまう服が非常に多く存在している。そのほとんどがリサイクルされることがなく焼却・埋め立て処分されている。また、次に挙げる低価格化によっても着用期間の短サイクル化が増長されている。

##### ・低価格化

価格を抑えるために、非正規雇用や外国人労働者を含む低賃金労働などの労働環境問題もある。

このような多くの問題を抱えているが、ファッションが世界中で生産され、分業されている背景から全ての問題の全容を把握することは困難である。



図1 3Rの図

(二) 環境に配慮した取り組みとは？  
前節で取り上げた問題に対して、ファッション業界では様々な解決方法が模索されてきた。

中でも「リデュース」「リユース」「リサイクル」をキーワードとした3R (スリーアール) は、事業者と消費者の両視点から取り組まれており、ファッション業界だけでなく各方面で推進されている。

「リサイクル」は、再生資源として再生利用することである。ファッション関連では、衣服を製造する紡績の過程で出る落ち綿や、縫製で廃棄された綿の裁断くずを集めてつくられるリサイクルコットン、廃棄されるベットのボルトを再利用することで生まれる再生ポリエステルなどがある。しかし、リサイクルコットンを使って環境に配慮していることを喧伝しながら、大量生産が行われ余剰在庫を増やしてしまう事例などの、新たな課題も生まれている。

「リユース」とは、使えるものはごみとして廃棄せずに再利用することである。製造されても消費者の手に渡っていない新品のものが、再び市場に出回るような仕組みも作られている。フリーマーケットアプリで古着を気軽に売買できるような環境も生まれ、リユース事業は大きく成長している。

「リデュース」とは、そもそもごみとして廃棄されることが少なくなるよう、ものを製造・販売することである。ファッション業界でも余剰在庫を減らすために大量生産を見直し、注文を受けてから生産する「受注生産」を行う企業が

増えてきている。

他にも、様々な配慮が見受けられるようになってきているが、一番大切なことはリデュースの心構えであり、一人一人がモノを大切に長く使うことでゴミとして廃棄されるまでの期間を長くすることが重要である。目先のトレンドだけを追いかけ、とりあえずサステナブル風な商品を製作するようなことはあつてはならないし、消費する側の意識も重要となるため、長期的な視座に立つて現状を考える必要がある。

本研究・プロジェクトは、衣類の短サイクルや廃棄問題を解決するための考えや行動を、作り手と消費者の両方に問うものである。

### 三、プロジェクトの実施と結果

#### (一) 和服・和裁の有効性についての調査

和裁という日本の技術について研究を進めるにあたって、株式会社後藤和裁(以下、後藤和裁)協力の元、循環型ファッションを可能にする製品開発のプロジェクトを立ち上げた。和服への関心から本プロジェクトに賛同いただいた後藤和裁を訪ね、和裁の技術をヒアリングすることから始めた。

環境・社会問題の解決策を導くための着物・和裁の有効性をヒアリングしてきた中で、次に挙げるのは、長く着用することを前提とした着物のメリットである。

着物は日本の伝統的な衣服であり、身分を問わず着用されてきた。着物を仕立てるための生地は、着尺・幅が共通で製作されるため、体型を気にせず着用できる衣服でもある。

特筆すべきは、手縫いによって力加減を細かく調整することができる点である。和裁士の技量によって、強く縫われる部分と優しく縫われる部分が組み合わさり、緩急のある着心地の良い仕上がりとなる。これこ



写真1 和裁士による手縫いの様子

そが和裁の技術である。

また、和裁は針を斜めに入れて布への負荷を少なくしているのも特徴の一つである。縫い目に等しくゆるみを施し、遊びを作ることで生地にかかる負荷を逃すような工夫がされている。

ミシン縫いのように生地穴を空けないため、着物として仕上がっているものも糸を解いて布に戻すことができ、別の着物として仕立て直すことができることも分かった。

## (二) 現代の和裁士を取り巻く問題点

和服を仕立てる和裁の技術には、環境問題の解決に寄与できるかを考える上で可能性を感じる。一方で、後藤和裁へのヒアリングから、和服を作る和裁士を取り巻く問題も明らかとなった。

日本人の着物離れによって、和服業界は低迷している。これに伴い、消費者の和裁に対する認知度も低下の一途を辿っている。さらに和裁士が正社員として働くことができる場・和裁を学べる場が減少している。このように和裁を取り巻く環境は決して良い状況とはいえない。

腕の良い和裁士の高齢化も進んでおり、技術を受け継ぐ若い和裁士の存在が減少傾向にあることは、和服業界の課題となっている。実際に、和裁を教えることができる熟練の方たちは高齢となって引退し、まだ若い和裁士がこれから指導者になるまでには時間を要する。そうした背景から、和裁所での生徒募集も減少しているのが現状である。

このままでは和裁士という職人の技術継承が困難になり、消え行く可能性があることが分かった。和裁の技術を残すためには、和裁士の仕事が増えていかなければならない。

## (三) 和裁を用いて新たに構築した服の特徴

本プロジェクトで取り組んだ製品の特徴は、和裁の技術を用いて新たに構築する服である。

そもそも手縫いで仕立てられる着物は、本章(一)で示したように、長期間に渡って使い続けることができる。その反面、和裁よりも洋裁の技術を用いる方が安価で手間も掛からないというデメリットもある。環境問題の解決や消費者

側の意識づけに寄与することを考えれば、あえて和裁を用いず手軽な洋裁による着物のリメイクも一つの手法として考えられる。

しかし、着物から洋服への一方向のリメイクではカバーできない部分がある。それは着物を縫う「和裁士」の仕事にならないという点である。しかも、単に和裁の技術を用いて洋服を縫製するだけでは、コストのかかる服にしかならないため、和裁士を取り巻く問題の解決策につなげることはできない。

そこで考案したのが、一方向のリメイクではなく、洋服に作り替えた後も着物に戻すことができる双方向のリメイクである。洋服を仕立てる際にも和裁を用いて縫い直しができるようにしておくことで、「着物」と「洋服」の循環を生み出す。循環型リサイクルの発想である。「着物」と「洋服」を行き来を前提に、和裁の技術を取り入れた仕組みを確立できれば、和裁の需要を創出することにもつながるはずだ。

次の図(図2)は、手縫いの着物をほどこいて反物に戻せること、洋服を仕立ててから、別の着物として縫い直せることを前提に設計したパーツ構成・裁断図である。

着物は本来、必要最低限の裁断パーツで縫製されている。本作品では着物と洋服が循環できることを念頭に置き、同量の布からそれぞれの形に展開できるような型紙(一部使用しないパーツは除外している)の設計を行なった。

「着物」と「洋服」双方向に仕立て替えることを前提としているため、着物として着用した際に縫い目が見えない箇所で裁断を行う。洋服の型紙のように曲線部分を切り落としはしていない。さらに着物から洋服に仕立てるためのパーツを確保する等の工夫も行っている。

この仕組みを作り上げることで「着物」から「洋服」、「洋服」から「着物」、また「洋服」から「洋服」へと相互に縫製し直すことができ、仕立て替えることで別の服としてつくり変えることを可能としている。

着物・洋服どちらかに飽きてしまったとしても、仕立て替えを行うことで違う服として生まれ変わらせてから、また着ることができる。それは「長く着られることを前提とした服作り」であり、良い製品を大切に長く着用するという「リデュース」の観点からも理にかなったアプローチである。



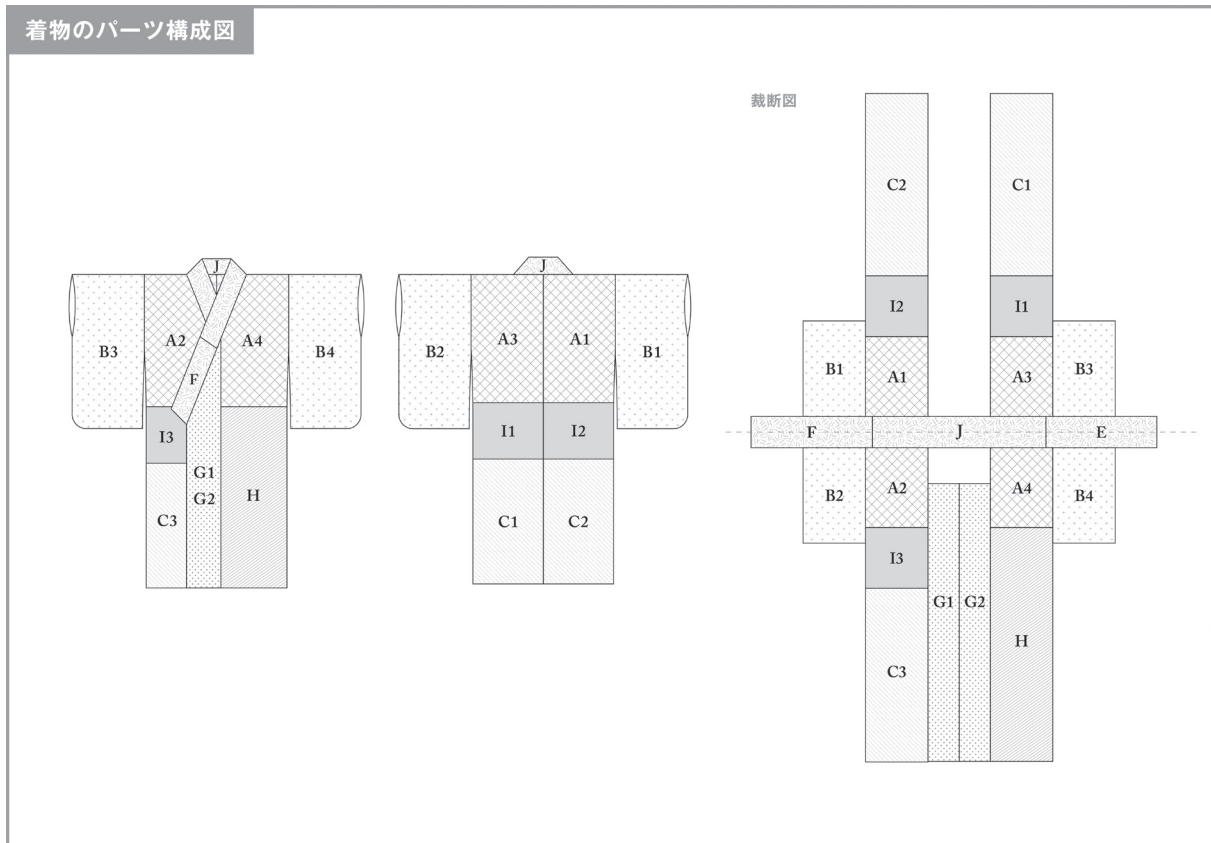


図2 着物のパーツ構成図と裁断図

#### (四) 反物を用いた仕立ての検証

次に、設計した型紙を使った仕立ての検証を行う。

一般的な着物を仕立てる手順と、「洋服」⇔「着物」双方向を可能とする循環型ファッション製品としてコートを仕立てる場合、いずれも日本特有の着物を作るのに用いられる生地幅「小幅」の生地を使用した。

前提として、反物から着物を仕立てる場合は、次の手順となる。

##### ①、身体の測定

身長、胸囲、腰囲、衿などを測定することで、着物の寸法を決めるための基礎データを取得する。

##### ②、寸法を決める

身体測定の数値から着物の寸法を決めること。

##### ③、着物の種類の選択

訪問着、振袖、色留袖、付け下げなどの種類によって用途や着装方法に違いがあるため、着物の種類を選択し、その種類に応じた寸法の設定を行う。

##### ④、着物のデザインの確認

柄や模様など様々なデザインがあるため、デザインによって必要な寸法の調整が必要かどうかを判断する。

これを前提として、本プロジェクトで反物からコートを仕立てる場合の手順を示す。①の身体の測定は同様に行うが、以降は留意すべき点や手順の違いがある。本製品は循環型ファッションをコンセプトにしているため、手順②の寸法を決める時点でコートの仕上がりだけでなく、後に着物に仕立てる直す際の寸法も確認しておく必要がある。

##### ③以降は手順が異なり、次の通りとなる。

##### ①、身体の測定

身長、胸囲、腰囲、衿などを測定し、基礎データを取得する。

##### ②、寸法を決める

身体測定の数値から、コートと着物の寸法を決める。

##### ③、反物の長さの幅の確認



写真2 展示発表の様子（京都会場）

コートを仕立てるための寸法設定だけでなく、着物へ仕立て替える際に十分な長さや幅があるかどうかを確認する。

#### ④、着物への仕立て替えが難しい場合

反物の長さや幅が充分ではなく、コートから着物に仕立て替えが難しい場合、他の布を足し布にするなど条件付きで着物に仕立て替えができるかどうかを考える。

以上のように、「着物」と「洋服」双方への仕立て替えを可能にするためには、コートを仕立てた後に着物へ仕立て直すことを考慮しなければならない。

今回の検証で小幅の反物を使用した結果、手順③の時点で反物の長さや幅が充分であれば理想的な裁断で「コート」と「着物」の双方を循環するファッションとなり得る。ただ、反物の長さや幅がコートの寸法に足りていないとしても着物の寸法に十分でない場合には、仕立て替えを行う際に足し布などを必要としたり、循環が難しくなったりすることが分かった。



写真3 着物



写真4 コート

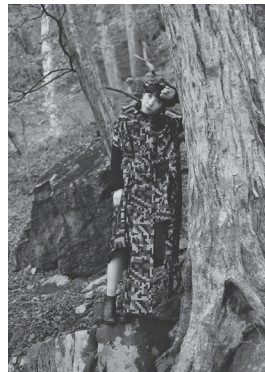


写真5 ワンピース



写真6 和裁の道具展示（京都会場）



写真7 織研新聞（2022年1月26日発行）

#### (五) Kimono Kirumono CYCLE PROJECT 展示発表

二〇二二年二月一日から一九日までTime Machine Goes Big Time（京都市上京区）にて「Kimono Kirumono CYCLE PROJECT（以下、KKCP）」と題して研究成果の展示発表（写真2）を行った。

KKCP 展示発表ではメインの作品として、着物一点（写真3）とコート一点（写真4）、ワンピース一点（写真5）を制作し展示した。裁断の展開図と各パーツの構成図を同時に展示し、どのパーツが入れ替わっているのかを視覚的に認識できるよう工夫した。また、和裁士の仕事として縫製工程の動画を上映し、職人の高い縫製技術を見せるとともに和裁士が使う道具（写真6）も同時に紹介することで和裁士への興味、関心を抱かせるきっかけとしている。

会期中の来場者数は延百名程で多くの方々からご意見やご感想を頂いた。一般の多くの方からは「和裁に対する興味を持てた」、アパレル業界で働く方からは「改めて業界の問題を見つめ直す機会となった」とお話を頂いた。現役の和裁士の方も来場され「このような活動が多くの人たちに広まり、和裁に興味を持って和裁士という仕事に就きたい人が一人でも多く出てくれれば」と期待の声も寄せられた。

本展示は二〇二二年一月二六日の織研新聞（写真7）に掲載され一定の外部評価を得るに至った。

#### （六）着物↓洋服への仕立て替え検証

次の展開として、一般消費者からタンスに眠る着物を提供してもらい、本プロジェクトの仕組みで洋服に作り変える検証を行う。前述の京都で実施したB2Cで展示会での発表作品は、反物からコートやワンピースを仕立てたものであったが、今回は一般消費者が実際に使用する着物を使つての仕立て替えとなる。手持ちの着物をコートに変えてみたいと賛同してくれる一般消費者をSNSで呼びかけ、応募のあった方から実際に使われていた古い着物を提供してもらう。預かった着物を使い、和裁士による手縫いの技術で洋服に仕立て上げることができるかの検証を行った。



写真9 事例②の着物

この募集には、環境問題への意識が高く、普段から着物文化にも興味を持っている一般消費者からの応募があった。

#### 事例① 女性三〇代

提供…祖母のウール着物のアンサンブル（写真8）

コートへの仕立て直し

事例①の女性は、このプロジェクトが作り替える着物を募集して



写真8 事例①の着物

いることを知り、祖母から引き継いだ着物を、応募してくれた。提供してくれたのは、着物好きだったという祖母の遺品の中から自身が好むデザインであったウール着物のアンサンブルである。十年間以上、開けていなかったタンスの中にあったことから、虫食い箇所が見られる。そのまま着用することに躊躇したものの、現在の生活に溶け込む洋服に作り替えて大切に着ていきたいという要望である。

#### 事例② 男性三〇代

提供…中古で購入した女性用着物（写真9）  
コートへの仕立て直し

事例②の男性は、休日などに着物を着ることが多く、以前、柄が気に入って中古で購入していた女性物の着物を提供してくれた。自分に合う寸法は分らないが、羽織りに作り替えれば十分に活用法があるだろうと、リメイクを前提として購入されていたものである。

以上の二件はいずれもコートへの仕立て替えである。本プロジェクトで開発した設計（図3）を採用している。

実際に使用されていた着物を扱う際には、デザイン調整やコスト等においてクリアすべき課題が明らかになった。また、前回の反物から仕立てる場合と、使われていた着物から仕立てる場合とでは、さらに手順が異なる。①身体測定、②寸法を決めるまでは、本章（四）で示したように、反物からコートに仕立てる場合と同様である。コートへの仕立て直しを経て、再度着物に仕立て直す際には、身丈と桁丈が短くなる可能性が高くなるため、着物寸法を確認しておかなければならない。ただし、手順②における着物の寸法とは、持ち込まれた着物の状態に戻すものではなく、本プロジェクトで開発したパターンの着物に仕立て直すことを前提とした。

大きく異なる手順③以降は、次の通りである。

#### ③、着物の状態の確認

持ち込まれた着物を解き、各パーツの長さや幅を確認する。汚れや傷など、全



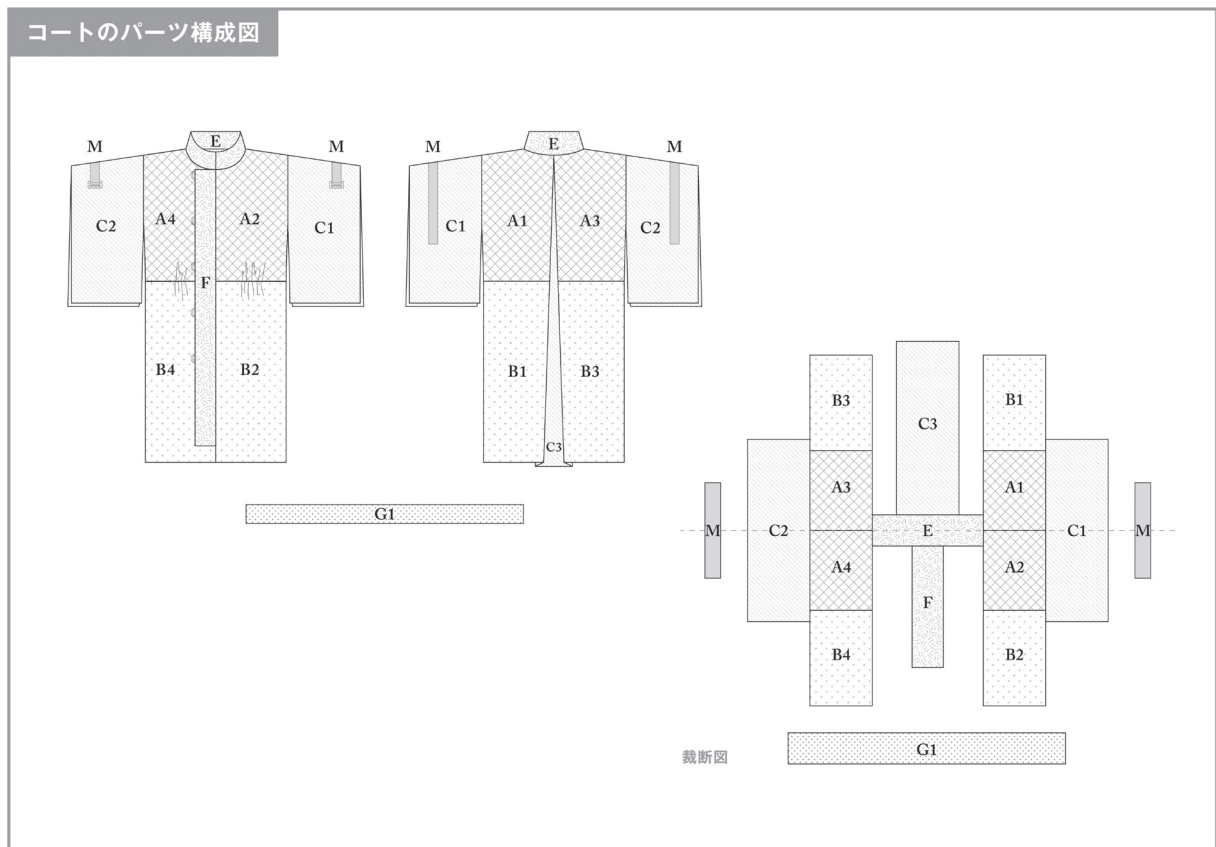


図3 コートのパーツ構成図と裁断図

体的な傷み具合等も確認する。

④、コートへの仕立て替えの方法を考える

元の着物の状態によってはパーツの入れ替え方が変わるため、具体的な方法を考える。

⑤、コートから着物に仕立て替えが可能かを考える

コートから着物に仕立て替えが可能かどうか、可能ならばどのような条件が必要かを考える。

一般消費者から提供を受けた古い着物からコートへの仕立て直しを検証する中で、洋服として仕立てた「コート」から、今後また最初の「着物」へ仕立て変えを行う場合には、反物へ戻した時の長さや布幅によって着物の身丈と桁が制限されてしまう可能性がある。これを踏まえてコートを仕立てる前に着物の寸法を確認しておく必要がある。

手順③以降は、最初の着物の状態によって仕立て替えができるかどうかが変わる。持ち込まれる着物の長さや仕立て方、汚れ、キズなどの様々な状況によってコートの後ろ身頃につくるボックスプリーツや紐に継ぎ目が出たり、コートの袖丈や紐が短くなったりする可能性があることも分かった。汚れや傷の補修が必要な場合もある。

また、柄合わせが必要な着物をコートや着物に仕立て直す際は、柄合わせは難しく、コートへの仕立て替え自体ができない場合がある。コートへ仕立て替えた後にさらに着物への仕立て替えは困難な場合が多く、できたとしても非常に手間のかかる作業が必要になる。洋服から着物に仕立て変える場合には、通常の反物から仕立てる着物よりも仕立て代が高くなる可能性もある。これらが、仕立て替えの諸条件として挙げられる。

#### (七) Kimono Kirumono CYCLE PROJECT 展示発表Ⅱ

二〇二三年二月、名古屋を会場に、古い着物から洋服への仕立て替えた作品の展示発表を行った。

本プロジェクトの展示発表としては第二弾となる。一般応募の着物を仕立て替えた作品の展示（写真10）には、本来の着物の状態で着用している写真パネルを準備して、仕立て替え後の作品と比較できるようにになっている。他、前回の



写真10 展示発表の様子（名古屋会場）



写真11 和裁の道具展示（名古屋会場）



写真12 織研新聞（2023年3月6日発行）

京都での展示内容を踏襲し、日本の着物文化を担ってきた職人の高い縫製技術が活かされていることを紹介している。作品を手がけた和裁士による縫製工程の動画上映や和裁士が使用する道具などを壁面に展覧（写真11）しているのは、本プロジェクトが課題として挙げた伝統技術への関心を集める試みである。

本展示は二〇二三年一月二六日の織研新聞（写真12）に掲載された。

また、消費者側の意識を調査することも展示会の目的の一つとして実施している。一般消費者のタンスに眠っていた着物が、和裁士によってコート等の洋服に仕立てられる過程を検証した他、着物提供者へのアンケート等も行っている。

る。

着用の感想と、本プロジェクトの取り組みについて、着物を提供してくれた参加者からの評価は次の通りである。

#### 【参加者アンケート】女性三〇代

私は断捨離が嫌いです。服に限らず、想いのあるものを、活かせる形で長く使っていたい。購入するものはこの先、ずっと愛おしみながら使っていけるもの、その価値が感じられるものを選ぶようにしています。物理的にも精神的にも、そのものが真っ当できることへ、憧れを感じます。今回お願いしたコートは間違いなくそんな一枚になってくれると思います。KKCPの企画を知った時も、とても嬉しく思いました。上質なものとそれを実現する技術、継続させようとする試みの中に敬愛があり、ワクワクがある。理想の中で語られることはあっても実際に全てが盛り込まれることは貴重なのではないかと思っています。

#### インタビュー…着物への関心について

自分でひと通り着付けができるようになった頃に、改めて勉強しようと思いい入会した着付け教室で「着物とは苦しいもの。それを我慢して美しく着ることが日本の伝統を守っていくこと」だと言われた経験があります。でも、誰かのためではなく、私自身が楽しいから着物を着ているんだと思ったら自由になりました。

#### 【参加者アンケート】男性三〇代

処分する以外の方法で着物を別の形にできればいいなと思っていました。そのままの使用が難しい状態のものを別の形に変え、元の着物の状態よりも良いと思える状態にできるのは素敵なことです。アパレル業界に限った話ではないですが、今後、KKCPのような考えが普通になる世の中になれば良いと思います。今あるものを当たり前とせず、一人一人が少しでも考えていけるようになればより良い世の中になるのでは。そういった足掛かりになればとても素敵だと思います。

#### インタビュー…着物への関心について

今まで「着物警察」と呼ばれる方に遭遇したことはありませんが、勝手に着付けを直されたり、着方や柄がどうだと言われたり、そのような話はSNSで



耳にします。あくまで印象ですが、気持ちのいいものではないですね。

#### 四、考察

プロジェクトで開発した製品は、長期間にわたって着られること前提としている。この仕組み自体が、環境配慮につながっている点は大きな特徴である。「着物」⇄「洋服」の相互に仕立て直すことができる和裁を、価値ある技術として次世代の育成につないでいく試みでもある。開発したパターンに基づく手順の検証を行った結果、循環型ファッションを可能とするためには新たな課題も生まれたが、本プロジェクトの新しい試みは着物文化や和裁という日本の技術への興味や関心を喚起するものであったと言える。

今回のプロジェクトに応募してくれた参加者は、そもそも普段から着物を着る機会が多く、日頃から環境配慮も心がけている男性である。女性の方は「着物普段着化計画」と銘打って着物の格式や決まりに気兼ねすることなく着物ライフを楽しまれている。自身が妊娠中にマタニティウェアを購入することなく着物を着ていたことから、着物の機能性・合理性に感服し、アパレル販売員として働いていた際は製品に付けられる価格と売れる価格、買い手の意識に歯噛みすることがあったという実体験もアンケートに書かれている。いずれも少なからず着物への関心を持ち、環境配慮への意識も高い消費者である。

本研究の背景にある環境問題・社会問題に対しても、「マネタイズ」「ビジネスモデル」「需要と供給」の視点から価値が語られることへ違和感を感じていることが言及されていた。「大量生産・大量消費」のファッションビジネスにおいて低賃金労働などが問題となっている中、こうした意識の広がりが社会を変え、行動になり、減少しつつある和裁への関心や和裁士の仕事創出にもつながっていくだろう。

今後の新たな課題としては、着物を自由に着ることに對して着物文化の厳格なマナーやルールに反すると指摘する人々「着物警察」の存在もある。伝統的に受け継がれてきた和装のマナーやルールは、着物文化を保護し、伝承するために必要な役割の一つである。しかし、参加者へのインタビューにもあったように、着物に興味を持ち始めた人や初心者にとっては、着物警察の固執した考えや厳しい指摘がハードルとなる。これからの着物文化を衰退させることにもなりかねないだろう。

「気軽に楽しむことができる」着物を魅力的な文化として興味を持ってもらうためには、着物の正しいマナーや知識を踏まえた上で、誤解や勘違いを減らす啓蒙を行っていかねければならない。着物文化の敷居を下げることも必要である。この新たな課題を加味しながら、今後は本プロジェクトの仕組みの中で、新たな洋服の形の研究を継続していく。同時に、多くの家に眠る着物の再構築にも挑戦し、研究を進めていきたい。

和裁士の技術が日本からなくなってしまうリミットは近づいている。このプロジェクトがきっかけとなって、消費者が一人でも多く着物・和裁に目を向け、一着の服と長く付き合っていきたいと思えるようになって欲しい。本研究が、そうした思考の変化を促す一助になれば嬉しく思う。

プロジェクトが開発した「着物」⇄「洋服」という循環型ファッションの仕組みは、あくまで手段の一つである。環境・社会問題にアプローチする小さな試みであるが、こうしたアイデアや仕組み作りの実践を持続していくことで、ファッションを消費する側にも、それを提供する作り手の側にも、地球環境・社会問題に配慮した考えや行動を広げていくことができるはずだ。また、和裁士の仕事を作り出すことによって、和裁という日本の伝統的な技術を守ることにも寄与できると考える。

#### 引用（又は参考）文献

- 国際連合広報センター「2030アジェンダ」、  
[https://www.un.org/ja/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/](https://www.un.org/ja/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/)（最終閲覧2023.4.16）。
- 環境省 大臣官房総合政策課「環境省サステナブルファッション」、  
[https://www.env.go.jp/policy/sustainable\\_fashion/](https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/)（最終閲覧2023.4.16）。
- 株式会社日本総合研究所「環境省 令和2年度 ファッションと環境に関する調査業務『ファッションと環境』調査結果」  
[https://www.meti.go.jp/policy/pdf/st\\_fashion\\_and\\_environment\\_r2gaiyo.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/pdf/st_fashion_and_environment_r2gaiyo.pdf)  
（最終閲覧2023.4.16）。
- 経済産業省「エネルギー・環境リサイクル 3 R 政策」、  
<https://www.meti.go.jp/policy/recycle/index.html>（最終閲覧2023.4.16）。

社団法人日本和裁士会『知っておきたい和裁の知識』、織研新聞社、一九九八年。  
『織研新聞』二〇二二年一月二十六日。  
『織研新聞』二〇二三年三月六日。